

## ●久留米大学 医学研究科

## 「感染制御看護師（ICN）養成プログラム」の事例 &lt;医療系&gt;

## 具体的に何を実施したのか

発展途上国や大災害など集団感染症の国際的現場で、感染管理活動が実践できるICN（感染制御看護師）の育成を目指したアドバンスド・プログラムと、国内の臨地国際的な感染症にも対応できるICNを養成するプロフェッショナル・プログラムの類型化した2つのコースを設置した。

具体的には、第1段階で、基礎的知識を涵養するため「看護倫理」「看護研究方法」「看護政策論」「看護理論」「コンサルテーション論」を開講し、第2段階で実践能力と実験技術・科学的分析能力を育成するため第一線の国内外の専門家による講義・演習・シミュレーションの専門科目を開設した。第3段階で、ICT活動フィールド研修、実地疫学のフィールド研修、国内外での学会発表やラボラトリーワーク、感染症患者看護実習の科目を開設した。また、国際学会でのプレゼンテーション能力育成の為、ネイティブによるプレゼンテーションセミナーを開講した。

## 実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

- ・最新の知識と技術が提供できるように、講師においてはより専門的で第一線で活躍している専門家、あるいは国内外での活動経験者を講師とし、教育内容の充実に努めた。
- ・ラボラトリーワーク、リサーチ、除染活動、感染症に関連したPPE等の教育活動、感染症ケアにおいて、国内外の感染症発生の現場で実践可能な能力を育成するため、教育環境を整備すると共に専門家による指導体制を強化した。

## どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

カリキュラムの充実により、専門性や組織として機能するために必要なことへの理解が深まっている。院生からは、フィールドワークや臨場感のあるバイオテロを想定した除染活動シミュレーション訓練後、感染症看護における課題や自己の課題についても見つめなおす発言が聞かれるようになった。また英語による専門授業やセミナー、国際学会での発表に対するアレルギーが消えたようである。むしろ、海外での学会発表の希望が増えている。プレゼンテーション能力も向上しており、他の研究科より評価を得ている。

## ●久留米大学 医学研究科

## 「感染制御看護師（ICN）養成プログラム」の事例 &lt;医療系&gt;

## 具体的に何を実施したのか

- ・多面的な学生指導を目指し、所属大学の研究室をまたがる複数教員による多面的指導を単位として認め、学生が積極的にこの仕組みを利用できるように推進した。
- ・「国際感染症実習 I」では、国立感染症情報センターで企画実施されている FETP-J へ参加し、1 か月間の英語での講義、疫学スペシャリストによる集中講義が受講できるよう整備した。
- ・疫学・サーベイランスの基礎となる統計手法のサポート体制として、平成 15 年度文部科学省科学技術振興調整費による人材養成ユニットとして開設されたバイオ統計センターによる、年間を通じたアドバイザー制を導入した。既開設科目のバイオ統計基礎ユニット・応用ユニットの履修を推進し、受講生の要望に応じて、随時セミナーを開催した。
- ・新型インフルエンザによるパンデミックや生物兵器テロ等の大規模災害や特殊災害を想定したシュミレーション訓練では、イギリスの特殊部隊で活躍経験のある SCAT JAPAN のスペシャリストの指導が受けられるよう整備した。
- ・科学的立証に基づく実践能力の向上をめざし、ケアや研究活動、環境感染調査における細菌やウイルス等の取扱い方、培養や細菌検査に必要な備品等の教育環境を整備した。

## 実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

- ・理論と実践力、研究力の総合力を養う指導体制と環境整備を目指した。具体的には、横断的科目においても、臨床での ICT（感染制御チーム）によるラウンドへの参加、FETP-J への参加、バイオユニットへの参加、シミュレーション訓練への参加、一般市民・在日外国人・小学生・高校生への感染症防止教育、看護実践などのフィールドを重視し、各専門の教員から指導が受けられる体制とした。セミナーでは、国外の感染症看護での実績をもつ専門家や災害時に国外において公衆衛生活動を実践した専門家に、具体的な経験をあげての講演をお願いした。

## どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

- ・学生は感染症看護について、異なる視点からの講義や演習・実習により、広い視野を得ると共に、将来への進路を考える上で、实际的で貴重な情報を得ることができた。また、統計ユニットへの参加は、研究へのモチベーションとスキルを高めるのに効果的であった。

## ●久留米大学 医学研究科

## 「感染制御看護師（ICN）養成プログラム」の事例 &lt;医療系&gt;

## 具体的に何を実施したのか

- ・ 国外の臨床におけるICT活動やICN活動、およびラボラトリー（WHO）の視察などのフィールドワークや、国立感染症情報センターでのFETP-Jの実地疫学研修に参加する機会を提供し、交通費及び宿泊費の支援を行った。
- ・ 大学院学生の学術集会における研究発表を推奨するために、感染制御・感染症看護・公衆衛生に関連する国内の学会もしくは国際学会に参加し、研究成果発表を行うための演題登録費用、交通費及び宿泊費の支援を行った。

## 実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

- ・ 実地疫学で日本のスペシャリストである国立感染症情報センターでの研修を単位として認める「国際感染症看護実習Ⅰ」を設置し、全てが英語での講義であるため、事前にネイティブによる講義を開設した。
- ・ 研究の初学者ではあるが、国際学会での筆頭演者として口頭あるいはポスター発表を単位として認める「国際感染症看護実習Ⅱ」を設置し、大学院学生の学会発表を奨励した。これについても、事前にネイティブによるプレゼンテーションスキルの講義をお願いした。
- ・ 国内での長期実習や国外でのフィールドワークにおける効果的な学習環境整備のために、ノート型PCや携帯プリンターを購入し活用可能とした。

## どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

- ・ 国際学会での発表前後や国外でのフィールドワーク後の報告会を開催することで、大学院生人数は少数であるが、モチベーションの向上が見られた。国内でのICN養成コースであるプロフェSSIONALコースにおいても、国際学会での研究成果の発表や、国外でのフィールドワークを希望する大学院生が増えてきた。また、英語での講義にも積極的に参加し、自信をもって英語で受け答えるなど、英語力の向上を認めている。